

【基盤研究(S)】

総合・新領域系（複合新領域）



研究課題名 アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的地域研究

京都大学・アフリカ地域研究資料センター・教授 おおた いたる
太田 至

研究分野：地域研究

キーワード：アフリカ、紛争と共生、潜在力、和解と社会的修復、在来の知識や制度

【研究の背景・目的】

現代のアフリカ社会が直面する最大の困難は、紛争による社会秩序の解体と疲弊であり、この課題に迅速かつ有効に対処することは、アフリカ社会の成長と安定にとって不可欠かつ最重要の「鍵」となっています。アフリカでは、とくに1990年代に入ってから大規模な内戦や地域紛争など、多種多様な紛争が頻発し、膨大な数の難民や国内避難民が発生しました。そして、こうした事態に対処するために国際社会は、軍事的介入や停戦・和平協定の締結支援、紛争後の制度構築への協力、国際刑事裁判所などによる司法介入、NPOなどの市民社会からの支援といったかたちで関与し、一定の成果をあげてきました。ただし、こうした介入を強力に主導してきたのは、リベラル・デモクラシーや「法という正義にもとづく処罰」という欧米出自の思想や価値規範です。

これに対して本研究は、アフリカ人がみずから創造・蓄積し、運用してきた知識や制度（＝潜在力）が存在し、それが紛争解決や共生を実現するために有効であったし、現在の紛争処理や人びとの和解、紛争後社会の修復にも活用できるという立場をとります。また、アフリカの潜在力を固有で不変の実体とみなすのではなく、西洋近代やアラブ・イスラームといった外部世界からの影響と、つねに衝突や接合を繰り返しながら生成されてきたものと把握し、その変革能力をインターフェイス機能と名づけます。そして本研究は、アフリカの潜在力を再評価し、国際社会などの外部から移入される諸要素との接合をとおして、紛争解決と共生のためにその潜在力を有効に活用するための実践的な方途を考究することを目的とします。

【研究の方法】

本研究では、以下の4つの「統一課題」を設定します。第一には、紛争が発生する機序と実態の解明、第二には、アフリカ社会の基礎的な潜在力の同定、第三には、外部から移入される要素と在来の潜在力とのインターフェイス機能の解明、そして第四には、国際社会からもたらされる外来の解決方法に関する研究と在来の潜在力に関する研究成果を接続するための思考実験的な研究です。

この4つの課題を解明するために本研究では、アフリカにおける長期のフィールド経験をもつ多

分野にわたる第一線の研究者を結集し、フィールドワークを基礎とした地域研究の方法論によって研究をすすめます。有機的連関をもって研究を推進するためには、基軸となる「全体会議」のもとに4つのテーマ別「研究ユニット」と4つの地域別「研究クラスター」を交差させる研究体制を構築します。そして、国際的な議論を深めるために「アフリカ紛争・共生フォーラム」を毎年アフリカ各地で開催します。また「紛争・共生をめぐるアフリカの潜在力データ・アーカイブ」を作成して公開します。

【期待される成果と意義】

本研究は、紛争解決や平和構築に関する従来の議論のなかで無視されてきたもの、すなわち、アフリカ社会が蓄積してきた知識・制度などの対処能力（＝潜在力）やインターフェイス機能を解明し、その活用の道を探るところに最大の意義と特徴があります。そして分野横断的な地域研究の手法によって統合的・学際的な研究を実施し、アフリカ人をはじめとする外国人研究者やNPO関係者などとの共同作業による開放的な研究を推進することをとおして、研究成果を国際的に発信します。また、現代アフリカが直面する困難な課題の解決という社会的な要請に向きあうことは、地域研究者の責務であると考えています。

【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

Ohta, I., 2009. "Pastoralists are proficient in cultivating positive social relationships: Case of the Turkana in northwestern Kenya." *Mila (NS)*, 10: 24-38.

Ohta, I. and Y. D. Gebre, (eds.) 2005. *Displacement Risks in Africa*. Kyoto: Kyoto University Press.

【研究期間と研究経費】

平成23年度－27年度
157,600千円

【ホームページ等】

現在、本研究専用のホームページを準備中ですが、概要は以下に公表しています。

<http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/kibans/index.html>